

# 令和7年 第3回総務経済常任委員会会議録

令和7年3月13日 議員控室

## ○事 件

所管課報告事項

- (1) 八雲町水産試験研究施設の研究内容報告について（産業課）
- (2) 電子契約の運用開始について（会計課）
- (3) 令和7・8年度建設工事等競争入札参加資格審査結果について（建設課）
- (4) 株式会社木蓮の運営体制の変更について（商工観光労政課）

## ○出席委員（8名）

委員長	安 藤 辰 行 君	副委員長	牧 野 仁 君
	大久保 建 一 君		倉 地 清 子 君
	関 口 正 博 君		三 澤 公 雄 君
	宮 本 雅 晴 君		横 田 喜世志 君

## ○欠席委員（0名）

## ○出席委員外議員（5名）

議長	千 葉 隆 君	副議長	黒 島 竹 満 君
	赤 井 睦 美 君		齊 藤 實 君
	佐 藤 智 子 君		

## ○出席説明員（12名）

産業課長	佐々木 直 樹 君	水産技術主幹	田 畑 司 男 君
嘱託職員	黒 丸 勤 君		木 村 和 世 君
会計課長	佐 藤 尚 君	会計課長補佐	高 橋 昌 子 君
会計係長	菊 地 貴 志 君	建設課長	藤 田 好 彦 君
建設課長補佐	池 田 裕 史 君	管理係長	松 田 力 君
商工観光労政課長	井 口 貴 光 君	労政係長	渡 辺 直 樹 君

## ○出席事務局職員

事務局長	野 口 義 人 君	事務局次長	成 田 真 介 君
------	-----------	-------	-----------

[開会 午前 9時54分]

### ◎ 開会・委員長挨拶

○委員長（安藤辰行君） おはようございます。これより総務経済常任委員会を開催いたします。挨拶は、割愛させていただきます。

### ◎ 報告事項

#### 【産業課職員入室】

○委員長（安藤辰行君） それでは早速、報告事項に入っていきたいと思います。

一番目の八雲町水産試験研究施設の研究内容報告について、産業課ご報告お願いいたします。

○産業課長（佐々木直樹君） 委員長、産業課長。

○委員長（安藤辰行君） 産業課長。

○産業課長（佐々木直樹君） それでは水産試験研究施設の研究内容の報告させていただきます。

その前に、前回イトウの関係で水産課で当初委員会に報告した際に研究棟のことも少し出まして、町の意見とか大学の方に言ったり、反映してもらえる状況にあるのかっていう質問があったかと思うんですけども、その際に私の方でできるかできないかみたいな、できる状況ですっていうだけ答えさせていただいたんですけども、町だったり漁業者の意見を伝えるっていうか協議する場として、研究棟の協議会というのがございまして、町と大学と町内の檜山漁協、落部、八雲の3漁協で構成されてまして、ここ数年コロナっていうこともあって開催できていなかったんですけども、来年度以降の事業について3月25日にその協議会を開催しまして、開催できていなかったんですけども、その中で漁業者だったり町の提案を反映できるような形で進めるように考えておりますので、よろしく申し上げます。

それでは担当の方から説明させますので、よろしく申し上げます

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） 委員長、木村。

○委員長（安藤辰行君） 木村さん。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） それでは、令和6年度の内容について私の方から報告いたします。

まず資料の1ページ目、1の海藻類について報告いたします。ダルスについては例年通りなんですけども、できるだけ効率よく育てる方法と、あとコンブ類については確実に種苗糸を生産するというのを目的の視点で行いました。

内容については、ダルスは研究施設の前の港のところに着生板を垂下しまして自然状況にどのような成長するかというので、成長状況などを観察しました。

コンブ類については、昨年10月8日に落部でマコンブの母藻採取していただいて、10月10日に採苗しました。

これらの成果ですが、ダルスについては、今年度は室内では育てずにあえて外で育てたんですけども、1月末に垂下した場合、天然なものだと4月ぐらいに枯れてしまうんですけども、6月ぐらいまで枯れずに残っていたっていうことと、あと自然の条件で育てると天然のダルスに似たこととか幅のあるようなダルスになるっていうことがわかりました。

コンブ類については、今回で3年目だったんですけども、今までで一番短期間でほぼほぼ6週間でいつでも出せますよっていう状況まで育てることができまして、天気の関係なんかもあったので、熊石の方へは11月の末、落部の方へは12月初旬に500m以上無事に出荷できました。

課題ですが、ダルスについては、今まで室内でずっと育ててその結果どうやってコストと手間を抑えるかっていうのを一番の課題として取り組んで、今年外で育てるっていうことをやってきたんですけども、ただ、外で育ててもやはり夏の水温が高い間では中で育てるしかないので、ただそうなったときにやっぱりどうやってコストと手間を抑えるかっていうところがなかなか解消できないってところが大きな課題でした。

コンブ類については毎年毎年、落部の方のマコンブ自体が減ってきてるっていうことなのでできるだけ状態の良い母藻を確保するということが課題になります。

2ページ目、令和7年度の計画ですが、ダルスについては先ほど言いました通り、今までの試験を続けてきた結果が、なかなか課題の克服目途が立たないということで一旦ちょっと来年度以降は休止にします。

コンブ類についてはこれまで同様、できれば10月初旬までに採苗して、12月の初旬までに出荷ということを目指します。以上が海藻の報告になります。よろしくお願ひします。

○委員長(安藤辰行君) ただいま報告いただきましたけれども、何か質問はありませんか。

○委員(三澤公雄君) はい。

○委員長(安藤辰行君) 三澤委員。

○委員(三澤公雄君) 休止が決まっちゃってるんで、質問してもあれかなと思うんですけど、ダルスが高温期に室内で栽培した場合、手間とコストが非常にかかるってあるわけですけど、室外であっても、何か温度を下げるのは、こっちはもう海洋深層水は冷たいもんだっていうイメージがあるから、あれが流入するようにすればいいだけのことなんでそんなに手間がかからないんじゃないかっていう、どうしてもイメージを持ちちゃうんですけど、もちろん海洋深層水の冷たさなんか活用してると思うんですけど、どういった手間がかかっているのかなっていうのをちょっとお話してもらえれば。

○産業課海洋深層水推進係研究員(木村和世君) 委員長、木村。

○委員長(安藤辰行君) 木村さん。

○産業課海洋深層水推進係研究員(木村和世君) まず深層水を使うメリットはもちろん水温を下げられるっていうことなんですけども、デメリットは栄養成分が多い分、珪藻類がとでも多いんです。

なので、どうしても室内で光を当てて育ててやると、珪藻がたくさん増えてしまって、ダルスもどういった商品にするかにもよるとは思うんですけども、やはり珪藻とか雑海藻の少ない状態が商品としては好まれるんだろうなとなると、そういったゴミとか雑海藻を混ぜられないようにダルスだけを集めようと思うと、非常に手間がかかる。

これまでの試験の中で、あくまで試算なんですけども、1㎡2キロ分ぐらい1ヶ月半とかぐらいで、1㎡2キロぐらい作れるっていうふうなことをやってきたんですけども、それも実際に1㎡分育てたわけではなくて、着生版の大きさとそのとき刈り取った量を㎡換算したらどれぐらい取れるだろうっていう。

なんでそれを実際にやらなかったかっていうと、1㎡になるととても1人、2人では無理だっていうところで、ちょっとそこまで今まではやらなかったっていうのが現状です。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤さん。

○委員（三澤公雄君） さらに素人が追い打ち掛けるけどさ、珪藻を好んで食べる生物か何かがいて、水槽に入れてるとダルスよりもそっちを食べてくれるみたいな、そんなものっていないの。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） 委員長、木村。

○委員長（安藤辰行君） 木村さん。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） 魚を飼っている水槽であれば、例えばブレコであったり、そういった水槽の周りに付着したものを食べるっていうこともあると思うんですけども、珪藻だけを好んで海藻を食べない生き物って言われると、ちょっと思いつかないですね。

○委員長（安藤辰行君） よろしいですか。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 他にありませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） それでは次、報告をお願いします。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） それでは次の2、魚類に移ります。

魚類の目的ですが、人工授精による全メス種苗生産とともに育成、それから偽オスと通常メスの自然交尾による全メス種苗生産を目的に行いました。

昨年度いろいろとご指摘いただいたことも踏まえまして、今年度は研究施設で育てた魚の試験販売等も検討して、研究施設以外での養殖試験を実施することで研究過程で生産された魚を有効活用して、地域貢献に繋がるような方法をとれないかということにも取り組んできました。

内容ですが、昨年5月、偽オスの精子を人工授精したメスが無事に種苗を生んでくれましたので、おそらくそれが全メスであろうということで育成を開始しました。

研究施設以外での養殖試験として、落部の佐々木漁業部さんで0歳の種苗を入れてもらってそこで育てていただくというようなこともやり始めました。

これらの成果ですが、昨年6月に生まれたおそらく全メスであろうという種苗が何度かサンプリングして、本当に全メスかと調べた結果、間違いなく全メス種苗だということで、初めてクロソイの全メス種苗生産ということに成功しました。

研究過程で生産された余剰分の成果物の有効活用ということで、地元漁業者の協力を得て、今年度一応試験販売するというので、大学と合意を得られて一応3月17日に出荷ということは今予定しております。

これらの課題ですけれども、令和6年度、今年度初めて全メス種苗ができたんですけども、思ったよりもたくさんを産めなかったの、来年度以降、十分な種苗数の確保を目指すということが課題です。

令和7年度の計画ですが、これは先ほど課長からもあったように具体的には3月25日の協議会の中でさらに話し合うことにはなると思うんですけども、一応5月、6月あたりで、おそらくまた全メス種苗が生まれるであろうというような状況ですので、それらが生まれれば、多くの種苗を生産して、その中からさらに親を選別したり、試験販売に向けた十分な数の育成を行うことを基本にしております。

以上が、魚の報告になります。よろしくお願ひします。

○委員長（安藤辰行君） 今、魚の報告がありましたけど、何か質問ありませんか。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（斎藤 實君） 三澤議員。

○委員（三澤公雄君） ソイは、北海道のタイっていうぐらい割と高級魚ではないけど釣ったら嬉しい魚だから、イトウの話を聞いたときに、サーモンの時点でも、なぜクロソイをいろいろ研究しているのに、これの増殖とか養殖のほうに道を開かないんだろうっていう声って少なからずあると思うんだけど、そういう方向にはこの研究はいかないのか。

どうも研究止まりで終わってるようなイメージがあるんだけど、要するに、地場産業としてのクロソイの増殖、全メスだとかいろんな努力がそういった現場においてくるところに、目指していないようなイメージがずっと全部消えないんだよね。どうしてだろう。

○水産係長（田畑司男君） 委員長、水産係長。

○委員長（安藤辰行君） 水産係長。

○水産係長（田畑司男君） ただいまの質問ですが、とりあえずイトウの話が出たんですが、イトウの飼育って卵から育ててっていう話の中で、海では約半年、サーモンと同じっていう説明を以前したと思うんです。

ソイの場合、生まれてから4、5年かかるんです。

○委員（三澤公雄君） 商品化サイズまで。

○水産係長（田畑司男君） 今は落部の佐々木さんの方で、とりあえず試験的にやっていますが、この3年間持ちこたえられるかなっていうやつも心配です。というのは、期間が長すぎる。ただ全メスにしたときに、オスよりもメスの方が成長がいいんですよ。

だから今、どういうふうになるかっていう期間なんです。オスを入れないで全メスにするっていうのがこれからの試験になると思いますんで、よろしくお願ひします。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤議員。

○委員（三澤公雄君） 聞きそびれちゃったのかもしれないけど、今の説明まで聞いてやっとならぬに根ざした研究なんだなっていうところがわかるので、報告の仕方も僕ら素人にもなるほどってわかるような説明にしてもらった方がいいかなって思いました。

合わせてさっきの話に戻るけど、俺珪藻類の話をしたときに、どうしても魚ってイメージしちゃうのかもしれないけど、貝。今ネットで見ても、アサリなんか珪藻も好んで食べるって。それからいくと、熊石のなくなりつつある資源だけど白い平べったい貝があるじゃん。白い砂の中の。あれなんかもアサリが好むのであれば、白いやつからも珪藻を好むとしたら、一緒に何かダルスを増殖する上での障害物除去として一石二鳥になるのかなって思ってたんだけど、そういう捕食動物の活用ってことはもう既に実験してるの。

○水産係長（田畑司男君） 委員長、水産係長。

○委員長（安藤辰行君） 水産係長。

○水産係長（田畑司男君） 今の話の中で、アサリからマサガイっていう白い貝の珪藻類を食べる様子をする話の中で、とりあえず試験はしてないです。そういう中で、海藻の中に珪藻類があるときはおそらく食べると思うんですが、もう食べきれなくてダルスに付着したものはそのまま伸びているんですよ。本当に全部食べきれないっていうことはまず不可能に近いので、付いていくと思うんです。

だから、これはダルスだけでなく、コンブの種苗糸作るときも、正式名称がコンタミって言って、必ずこの珪藻類が混ざると。僕たちが欲しいコンブの種苗糸の前に珪藻の方が強いんですよ。だから、そのときの漁協もすごい大変なんです。だから、ダルスにもそのことが当てはまるということでございます。

○委員長（安藤辰行君） いや、難しいな。

○委員（三澤公雄君） 海流を絶えず起こすだとか、アサリだとか貝の密度をもっと多くするだとか。

だってアサリなんて、すごい大役を担わされたときあったでしょ。東京オリンピックのなんか協議するのに、海を綺麗にするのにアサリをって、無茶なことやるなって思ったけど。それがまともに、そんなことをやってるところもあることを思えば、水槽内に増えすぎた珪藻類を除去するって、ダルスに付着する前に食べてしまうぐらいの密度のアサリ類、その白い貝でも食べるかどうかわかんないけど。

アサリが食うんだったら熊石の海洋資源のその白い貝も素人考えだけど、ウィンウィンになるのかなと思ったんですよ。密度って。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） 委員長、木村。

○委員長（安藤辰行君） 木村さん。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） 先ほどのその東京湾の話ですと、ちょうどお台場のあたりでやってたんですけども、あくまで海岸の砂の中にアサリを入れて、あとは東京久栄という会社が開発したペレットの中にアサリを入れてっていう実験もやってたんですけど、何もない海水の中だけで育てると、おそらくそんなに貝は育たないです。やはり砂だったりペレットだったり、その中にダルスがあるとどうなるかっていうと、砂まみれなので結局はダルスが育たないです。

○委員（三澤公雄君） ダルスって砂あるとこじゃだめなの。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） 上に砂かぶってしまうと出てこないの。

○委員（三澤公雄君） だから、水中にダルスがあって、下に砂があって、アサリが住んで、アサリが給水管で海水の中の珪藻類を食べるっていうイメージでその数を多くすれば、とりあえず海水が動いてればダルスに付着する珪藻よりも食べる量が多くなるっていう実験はどうですか。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） おそらく、今の研究施設のスペックではちょっと無理があると思います。

○委員（三澤公雄君） わかった。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） すみません。しかもそこまで砂を入れ、貝を入れ。

○委員（三澤公雄君） 砂がない状況。要するにダルスはその試験は概要というか、自然環境とはあまりにも違うところで増殖試験をしてるってことなんだ。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） そもそも自然界でダルスが生えてる場所ってというのは、浅い波打ち際のあたりで生えてるんですけども、岩とかブロックに着いて生えているのですが、砂の中から出てくるわけではないんですよ。

○委員（三澤公雄君） 砂とも離れてるってことね。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） その胞子がもう砂をかぶってしまうと、出てくれなくなるので。

○委員（三澤公雄君） はい。わかりました。

○委員長（安藤辰行君） 他にありませんか。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 関口議員。

○委員（関口正博君） そもそもこの熊石の研究施設ってというのは、地元にかににして、いろんなことを還元していくかっていうことが一番の目的でなければならないと思うんですよ。その中で、クロソイ研究ってどうしても3歩進んで2歩下がる、そんなようなことの繰り返しだと思うんで、長い目で見てあげなきゃって思うんだけど、やはり町としては今回予算もしましたけど、お金を出しながらやっていただいていることなんですよ。

だから、今回改めて3月25日に漁業者との懇談もあるということで、漁業者はどのように臨んでるかっていうことは、やっぱり非常に大事な要素だと思うんで、しっかりとそれを聞いた中で研究対象だとかも見極めていただきたいな。

今のままでイトウとかもそうなんだけど、北大の研究のただ手貸しをしているだけじゃないかっていう目で見られてもしょうがないんですよ。こうやって報告いただければ、いろんなことがわかる。今までこういう取り組みしてきたんだよね。ダルスにしたって今回やめるんだけど、この研究がまたいつか役に立つかもしれないよねっていう部分があると思うんです。

やっぱり一番は、地元の産業にどう貢献していくかってことが第一義であっていただきたいですし、そういう研究であっていただきたいなと思います。

ただクロソイの件は、すごく大きな成果なんで。これは前浜でも結構やってて、成長が遅い、売るまでに時間がかかるっていうのは課題としてあってね。それをこうやって前に進んだというのは、すごい大きな喜びなんだろうと思いますんで、地元の漁師さんもきっと喜んでいただけるんじゃないかなと思います。

何とか理解するようにして我々も、ただお金の面ではどうしてもシビアに見なきゃならないということだけのご理解いただきたいなと思います。よろしくお願いします。

○委員長（安藤辰行君） 他にありませんか。

○議長（千葉 隆君） 一点。

○委員長（安藤辰行君） はい。

○議長（千葉 隆君） クロソイって育成期間が3年かかるって今おっしゃって、養殖だったらマグロとか大きい魚体で量も多いみたいな、サーモンも単価の●●もあるんですけども。ソイの場合もそういった魚種から比べると、1匹なんキロっていう感じだと思うんだ。

そうすると単価もいくらとか言ったら、そういった高級魚でやるにしても付加価値をつけるにしても、実際ランニングコストのことも考えていけば、サーモンでさえ半年間通う養殖、その前にも飼料の部分で育成するんだけども。何年ぐらいで要は短縮すれば、ペイするというか、そういう状況になるんですか。

○水産係長（田畑司男君） 委員長、水産係長。

○委員長（安藤辰行君） 水産係長。

○水産係長（田畑司男君） 何年ぐらいでペイするのかっていうやつ、とりあえず今回成長したものをを出してみるんで、そのときの相場っていうものがあると思うんです。

ただ売るにしても、サーモンのように脱血かけてちゃんと血抜きをして、それで一番なり出したときにどういう評価、そしてそのどのぐらいの単価取れるのかっていうのは、そのときの相場によるんで、ちょっとわかんないです。

何匹ぐらい買えば採算ベースに乗るのかって、それも餌代だとか、1名に対して、重量の3%になるのか4%になるのかっていう計算してるけども、とりあえず今のところまだ試算はしてないですね。

○議長（千葉 隆君） 委員長、議長。

○委員長（斎藤 實君） 議長。

○議長（千葉 隆君） 相場っていうのは相場なんだろうけども、相場も変動することもわかるけども、通年で例えばソイが相場あるけども平均値どのぐらいなんだよって。物価高の部分でいけばいくらなんだよってという部分、相場でもわかるだろうし。

一定程度、最終的に商業ベースに乗る可能性っていうのは、このぐらい短縮すればやれるっていう目途ないで、結局やって1年に短縮しましたよと。けども、そんなに単価上がらない徴収であったら、今までやってきたことが違うことに向けた方がよかったとか、そういうふうにならないためにも、そういうことも考えながらやる必要があるかなと思うんですけど。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） 委員長、木村。

○委員長（安藤辰行君） 木村さん。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） まずクロソイに関しては、こういった養殖をして、なおかつ寄生虫がまず付いていない状態のクロソイっていうのは、市場に多分出たことがないので、単価については全く未知の世界。おそらく買われる業者の方も、どういうものなのかっていうのが全くわからないので、今年度3月17日に出荷予定といたしましたけども、そこで初めておそらくどういう評価をしてもらえるかがわかると。

養殖期間についても、当初4年から5年ぐらいっていうのを大学の方ではやってたんですけども、そこから一生懸命頑張って全メスを作って、メスであればおそらく3年で1キロぐらいまで持ってくるんじゃないかと、700gか1kg近くぐらいまで持ってるっていうのを今までずっと積み重ねてきたっていう。

ですので、今年出荷サイズは 450 g 以上が出荷サイズにはなるんですけども、450 とか 500 のプロ設計がもうこれぐらいしかないので、北海道ではなかなか商品価値がつかない。やっぱりもう少し大きいサイズにならないと。

なので、3 年が果たしていいのかどうかっていうのは何ともではあるんですけども、もちろんもっともっと短縮できるに限るとは思うんですけども、今はまず 3 年間で 1 kg 近くまでを目指して、そこでどれぐらいの評価を得られるかをこれからやり始めていくというところ です。

今年やり始めてもらった佐々木漁業部さんのほうは、ホタテで普段使っている水槽が空いてる時期とかにうまく水槽を回しながら育てていくということを今やり始めてまして、餌代に関してはそんなにサーモンのような量を食べませんのでクロソイは。

餌代に関してはそこまで高くはならないと思うんですけども、ランニングコストその他いろいろ諸々含めて佐々木漁業部さんの方でまずそういった試算を出せるようにというのを今始めたところです。

○委員長（安藤辰行君） よろしいですか。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 他に質問ありませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） なければ次のウニ。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） 3 ページ目。3、ウニの報告いたします。

ウニについては、毎年同じことではあるんですけども、加速部である正職層をより高品質にするための餌の成分を調べ、餌を（聞き取り不能）ということを目的にした給餌試験。

それから今年度初めてですが、ウニ殻の施肥材を使った試験を開始しました。このウニ殻の施肥材が珪藻類とか海藻類にどういった影響を与えるかということを確認しました。内容ですが、給餌試験の方は今まで同様 10 週間、今年度新たに作った餌を給餌。

施肥材試験の方は、粉碎したウニ殻を天然ゴムで固めた四角いブロックのようなものを作りまして、それに表層水を掛け流してどういう影響があるかというのを確かめました。

これらの成果ですが、給餌試験については、高品質であるウニを作ることができるであろうというその可能性のある天然素材が見出されました。その素材の中にウニを高品質にする有効成分がおそらく含まれているであろうというところまでは突き止めた、というのが成果です。

施肥材試験の方は、今年度行った試験の結果だけであれば、多分環境には問題なくてむしろコンクリートよりも施肥材のほうが良かったという結果でありました。

課題ですが、給餌試験の方は、ある程度成分はわかったんですけどもそれが何かという同定までには至らなかった。今後、配合割合の成分をある程度絞り込んで、配合割合を変えた餌を給餌しながらもっともって検証していく必要があるというところが課題です。

施肥材試験の方は、今年度は夏と冬だけの期間しかやってませんので、1 年通してやったときにどうなかっていうところを検証する必要があります。

以上がウニの報告になります。よろしくお願いします。

○委員長（安藤辰行君） はい、ありがとうございます。

何か質問ありませんか。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 三澤議員。

○委員（三澤公雄君） 読んでも聞いてもまだちょっと理解できないんだけど、このウニ殻施肥材の方向、何の効果をこのウニ殻施肥材に付着した珪藻をウニが食べるの。どういう効果を狙っている試験なのか。ごめんね、理解不足で。

○産業課海洋深層水推進係研究員（木村和世君） まず、試験の目的については、コンクリートであれば何かしら有害成分があるだなんだっていうのが大体よく言われるんですけども、施肥材の場合はあくまでウニの内臓だなんだをただ乾燥させてつぶしただけの固めたものなので、ウニを処理する中でできる廃材を使って、尚且つそれがあるがために海藻が増えるとか、珪藻が増えるとかになれば、環境に良い意味での影響があるんじゃないかというのが狙いの一つ。

それから、資料の方の最後4ページ目の来年度の計画の部分は今読み忘れてしまったんですけども、こちらで来年度、この施肥材を使ったウニの行動試験をやる予定なんですけども、行動試験っていうのは逆にウニが施肥材を避けるような行動をすれば、逆にその海藻を増やしたいような場所に施肥材を置くことで、ウニが寄らなくなるんじゃないかということが一応狙いです。

○委員（三澤公雄君） そっかそっか。わかった。

○委員長（安藤辰行君） よろしいですか。

○委員（三澤公雄君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 他にありませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） ないようですので、これで終わりたいと思います。

ありがとうございます。

【産業課職員退室】

【会計課職員入室】

○委員長（安藤辰行君） それでは、次に5番目のよろしいですか。電子契約の運用開始について会計課、報告お願いいたします。

○会計課長（佐藤 尚君） 委員長、会計課長。

○委員長（安藤辰行君） 会計課長。

○会計課長（佐藤 尚君） おはようございます。それでは、電子契約の運用開始についてご報告させていただきます。

令和5年度経済常任委員会で政策推進会より説明がありました、八雲町DX推進全体方針の中に具体的な取り組み事項で、業務の効率化や締結コスト等の削減が図れる、電子契約について本年4月から運用を開始することとなりましたのでご報告させていただきます。

内容につきましては、会計課係長より説明させていただきますので、よろしく願いいたします。

○会計係長（菊地貴志君） 委員長、会計係長。

○委員長（安藤辰行君） 会計係長。

○会計係長（菊地貴志君） おはようございます。では、電子契約の運用開始についてご説明申し上げます。資料1 ページ目をお開き願います。

1、事業概要ですが、町と受注者双方の契約手続きの業務効率化および経費削減を図るため、GMO グローバルサインホールディングス株式会社が提供する電子契約システム GMO サインを導入し、電子契約の運用を開始いたします。

2、電子契約システムの概要についてです。紙の契約書に記名押印する代わりに契約書の電子データに町および受注者双方がインターネット上で電子署名をすることにより、契約締結を行います。

3、電子契約の主な効果ですが、紙の契約書が不要になるため収入印紙や郵便料といった、受注者側の経費負担が不要となる他、契約書への押印、契約書の印刷や冊子の作成、郵送作業が不要となり、業務の効率化が図られ、町側と事業者側双方の負担が軽減される見込みです。

4、電子契約の開始時期ですが、令和7年4月以降の契約解消する契約から運用を開始いたします。

以上、説明とさせていただきます。よろしく願いいたします。

○委員長（安藤辰行君） ありがとうございます。

ただいま報告いただきましたけれども、ご意見、ご質問ありませんか。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 議長さん。

○議長（千葉 隆君） 素朴な疑問なんだけど、ネット上で証明する、ネット環境があつてメール環境を整えればできるというのはわかるんですけど、紙でしたい業者がいたら、それはそれでいいのか、全部電子契約にしますよっていう開始時期が今4月なので、そういった関係どうなりますか。

○会計係長（菊地貴志君） 委員長、会計係長。

○委員長（安藤辰行君） 会計係長。

○会計係長（菊地貴志君） あくまでも電子契約できる事業所様については、電子契約をさせていただいて、紙の契約書で行いたいというところについては、今まで通り紙の契約書で対応させていただきたいと思っております。

○委員長（安藤辰行君） よろしいですか。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 他に。

○委員（佐藤智子君） 委員長、佐藤。

○委員長（安藤辰行君） 佐藤議員。

○委員（佐藤智子君） おはようございます。この GMO グローバルサインホールディングスってところの、ここに決まった経緯。他に競合企業があつたのかとか、ここに委託する経費ってというのはどうなってるんですか。

○会計係長（菊地貴志君） 委員長、会計係長。

○委員長（安藤辰行君） 会計係長。

○会計係長（菊地貴志君） 業者の選定の方法ですけども、見積もり合わせをさせていただきました2業者から見積書を徴収して対応させていただいたんですけども、その2業者というのが主に行政の方で電子契約を導入するシステムっていうのが二つございまして、GMOサイン、今回当庁のほうで入れさせていただいたシステムの他にクラウドサインというシステムもあるんですけども、そちらを取り扱っている業者の2社で、見積合わせをさせていただきました。安価でした GMO サインの方のほうのシステムを導入することになりました。

○委員（佐藤智子君） 今回のこの2社っていうのは、全国的に展開している企業なのかっていうのと予算上いくらかかるものなんですか、年間。

○会計係長（菊地貴志君） 委員長、会計係長。

○委員長（安藤辰行君） 会計係長。

○会計係長（菊地貴志君） まず今回当庁が入れさせていただく GMO サインですけども、国内の企業さんの方で入れているのが今現在ホームページを確認したところ 350 万社で、自治体の方はこちら選定する当時の7月時点ですけども、全国の 123 自治体で導入されているものとなります。

もう一つの方のクラウドサインという方のシステムは、全国で 200 自治体の導入されているということで、主に自治体導入しているシェアというか●●されている2社で見積もりの方もとらせていただきました。

予算の方ですけども、予算の方は、導入費用の方が初期段階の予算が 99 万円ということを見てみただけども、利用料については、11 万円程度というふうに予算はみてたんですけども、実際契約した金額というのは、ものすごい安価なんですけども初期導入で1円。運用で1円となっております。

これは利用されてるのは道庁さんですとか、室蘭市さんとか他の自治体も導入されてるんですけども、そこでも同様の金額で契約してるようでして、元々3か月くらい前にとった時にも予算がなかなか厳しいところもあるんですけども、どうしても差がございましたので、見積もり合わせで仕様書もしっかり作らせていただいて、ちゃんと●●いくかどうかも確認した上で施行させていただきたいと思います。

○委員（佐藤智子君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 他にはありませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） はい。ないようですので、これで終わりたいと思います。

【会計課職員退室】

【建設課職員入室】

○委員長（安藤辰行君） それでは3番目。令和7、8年度の建設工事等の競争入札参加資格審査結果について、いくつか報告をお願いいたします。

○建設課長（藤田好彦君） 委員長、建設課長。

○委員長（安藤辰行君） 建設課長。

○建設課長（藤田好彦君） おはようございます。それでは建設課の報告であります。2年ごとの方針となっている入札参加資格審査について令和7年度、8年度分の審査結果が取りまとめられましたので、管理係長の松田からご報告いたしますのでよろしく願いいたします。

○建設管理係長（松田力君） 委員長、建設管理係長。

○委員長（安藤辰行君） 建設管理係長。

○建設管理係長（松田力君） それで私の方から令和7、8年度建設工事等競争入札参加資格の審査結果について資料に基づいてご報告いたします。

まず一番の資格審査の申請受付方法でございます。前回の令和5年、6年度の審査から北海道市町村参加資格、共同審査協議会の共同審査に参加してございます。

この共同強度審査は、従来の自治体ごとに紙による申請書類を審査する方法に変わって、インターネット経由の電子申請について共同により審査および受付を実施するものでございます。この度の電子申請による受付期間は、令和6年12月10日から令和7年8月31日で実施しております。

この共同審査の参加自治体につきましては、北海道内の107市町村の他、北海道庁が参加しており、この107市町村のうち、渡島管内でいきますと9自治体が参加している状況でございます。

2番、申請の受付結果でございますが、資格審査を行った結果、有資格者が全部で832社、こちらが前回の令和5、6年度の資格審査から比較して50社の増となっております。

有資格者832社のうち、建設工事等の有資格者が484社。その他は、測量やコンサルといった企業になります。

またこの有資格者832社のうち、八雲町内の事業者は49社となっております、前回と比較して5社の減となっております。

3番、町内事業者のうち、更新しない事業者につきましては、こちら資料に記載している5社でございます。更新しない理由につきましては、そもそも企業が廃業しているというような状況や企業としては活動しておりますが、町の7年、8年度の工事等入札参加には、入札には参加しないということで申請をいただかなかった企業、合わせて5社が更新しない事業者となっております。

4番、新規の町内事業者ですが、こちらは今年度については新規の事業者はございません。

5番、町内受付事業者一覧ですが、別紙の資料に添付している通りです。各業種によって重複しているものがございまして、業種等を全部含めて、全更新の業者数でいくと100業者というような町内の状況になっております。このうち4業種については、町内工事発注する上で格付けというものをしておりますが、その格付けに基づいた名簿についても資料で参考までに添付させていただいております。

報告については以上です。よろしく願いいたします。

○委員長（斎藤 實君） はい。ありがとうございます。

今報告いただきましたけれども、それに対して質問ご意見ありませんか。

○委員（牧野 仁君） はい。

○委員長（斎藤 實君） 牧野さん。

○委員（牧野 仁君） ちょっとお聞きしたいんですけども、格付けの名簿を見まして今回は新規がないということで、例えばBからAに上がった業者。例えば、AからBに下がった業者っているのでしょうか。

○建設管理係長（松田力君） 委員長、建設管理係長。

○委員長（安藤辰行君） 建設管理係長。

○建設管理係長（松田力君） 格付けの等級が上がったり下がったりといった企業はございます。それ全てお答えした方がよろしいんですかね。

例えば、土木一式でいけば、例えばBのナンバー1 小澤建設さん、こちらが前回ですとA等級だったのがB等級というような状況でございます。

続きまして建築でいきます。今回の東急のナンバー3、北韓企業株式会社さんは前回でいくとB等級だったものがA等級というような状況になってはおります。

○委員（牧野 仁君） あとは、管とか解体はないの。

○建設管理係長（松田力君） 管については変更はありません。

解体につきましては、等級が変わってはいないんですが、申請の結果によって、前回解体のA等級で登録されていた業者が、今回は要は資格がないということで、そもそもこの登録から外れているという業者はございます。

○委員（牧野 仁君） ありがとうございます。

○委員長（安藤辰行君） よろしいですか。

○委員（牧野 仁君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 他にありませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） ないようですので、これで終わりです。

ありがとうございます。

#### 【建設課職員退室】

#### 【商工観光労政課職員入室】

○委員長（安藤辰行君） それでは最後の4番目、株式会社木蓮の運営体制の変更について、商工観光労政課報告をお願いいたします。

○商工観光係主査（渡辺直樹君） 委員長、商工観光係主査。

○委員長（安藤辰行君） 商工観光係主査。

○商工観光係主査（渡辺直樹君） おはようございます。それでは私から、株式会社木蓮の運営体制の変更について報告させていただきます。報告事項、表面をご覧ください。

まず現状について、これまで株式会社木蓮は本社、丘の駅、ペコレラの3部門での運営を行っております。各部門の取り組み内容は、報告事項記載の通りとなります。このうち、ペコレラ部門はこれまで観光交流人口の促進を図り、ペコレラの認知度上昇、交流人口の拡大に貢献してきたことで今後の安定経営が見込めるようになったこと。

また、本部門に派遣、従事していた地域おこし協力隊員は本部門で実践的な業務および企業への繋がる取り組みを継続した結果、昨年12月に協力隊員が起業を行うことができました。

変更事項として、ペコレラを木蓮の一部門という枠組みではなく、独立することで更なる発展が期待できるということを取締役および元協力隊で確認できたことから、令和7年2月7日に臨時株主総会を開催し、令和7年4月1日をもって、ペコレラ部門が独立することを決定いたしました。

これを受け、株式会社木蓮は2部門体制となりますが、まずは本社丘の駅部門でしっかり基盤作りを第一に行い、整い次第新たな事業の展開を検討するものと考えます。

以上、大変簡単ではございますが、株式会社木蓮の運営体制の変更について報告を終わらせていただきます。よろしくお祈りします。

○委員長（安藤辰行君） はい、ありがとうございます。

報告いただきましたけども質問、ご意見ありませんか。

○委員（大久保健一君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 大久保さん。

○委員（大久保健一君） すいません、ちょっと詳しく教えてほしいんですけど。

大関小学校の所有者は、確か青年舎ですよ。

今までは青年舎と木蓮の契約においてやってたと思うんですけど、今度はどういうふうになるんですか。

○商工観光係主査（渡辺直樹君） 委員長、商工観光係主査。

○委員長（安藤辰行君） 商工観光係主査。

○商工観光係主査（渡辺直樹君） 今大久保委員からお話ありました通り、大関小学校につきましては青年舎の方で木蓮との契約のもと今まで契約をして、ペコレラとしての運営をさせていただきました。

今後は、新会社設立が一応2月にされておりまして、いろいろな諸々の準備が整い次第、4月1日を契約として青年舎と株式会社の方が契約をするという話で聞いております。

以上です。

○委員（大久保健一君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 大久保さん。

○委員（大久保健一君） それは指定管理になるんですかね、賃貸契約なんですかね。

○商工観光係主査（渡辺直樹君） 委員長、商工観光係主査。

○委員長（安藤辰行君） 商工観光係主査。

○商工観光係主査（渡辺直樹君） 賃貸借契約になるというふうに聞いております。

○委員長（安藤辰行君） よろしいですか。

○商工観光係主査（渡辺直樹君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 他にありませんか。

○議長（千葉 隆君） あとちょっと。

○委員長（安藤辰行君） 議長さん。

○議長（千葉 隆君） 木蓮と大関牧場って持ち株してて、イメージでは持ち株をするのがペコレラの事業もあったからってというような感じっていうイメージだったんだけど、お互いに持ち株を持つっていうことは、兄弟っていうか姉妹の関係みたいな部分を終わるといって、本来は第3セクター同士だから独立した機関としてやってるんですけども、そうしたときに持ち株の部分についてはどのように今後考えたらいいんですか。

○商工観光労政課長（井口貴光君） 委員長、商工観光労政課長。

○委員長（安藤辰行君） 商工観光労政課長。

○商工観光労政課長（井口貴光君） ただいま議長の方からお話あったとおり、持ち株をした当初の目的に関しては、ペコレラがあったというのも一つ理由としてはございますけれども、同じ町が出資した第3セクターということで、要は業務的な部分で提携をして、お互いに発展していきましょうという考え方のもとでの持ち株と。

そういったことで当時お互いに株を持ったっていう流れがございますので、仮にこれがペコレラが独立したとしても違う事業でもって事業提携みたいなものをしていながら、お互いの会社がそれぞれ発展していくために、それぞれ貢献したりしていきましょうと。

こういった取り扱いになるかと思っておりますので、町の方では現在ある持ち株については、どのように対応するかっていうのは検討されておられませんので、現状のまま維持されるということで考えてございます。

○議長（千葉 隆君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 議長さん。

○議長（千葉 隆君） っていうことは例えば、今ウイスキー事業にも出資しましたよね。それから今後、公設民営ということで本会議でワイナリーの事業もやる。その部分も、独立した法人だっっちゃうけども。

そういった関係で言えば、八雲町が出資した営利的な部分、その2社だけでも、持ち株を増やすっていうことにならないと、そこだけが連携するっていうか、なんか牧場と商工だから逆を言えば、商工と例えば、ウイスキー事業とかワイナリー事業とか売り先っていうかね、そっちの部分で言うと、近い関係にあるからそちらの方とも持ち株、木蓮や青年舎と持ち株会社の関係を作るんでしょうか。

○商工観光労政課長（井口貴光君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 商工観光労政課長。

○商工観光労政課長（井口貴光君） 木蓮と青年舎に関しては、ともに人材育成という共通の目的があったということでそういった関係もありながら、当時設立して走り出したときにそれぞれの株を持ち合わせた流れがございますけれども、これから立ち上がるウイスキーの会社だったり、ワイナリーの会社については、現状では何かそういった話は出ておりませんので、持ち株ということにはならないというふうに私どもでは認識してございます。

持ち株がいいのかどうかという部分、以前も議論されたと思うんですけども、そういった部分も当時の議論も含めておそらく判断されると思いますけれども、現状ではそういう話は伺ってございません。

○委員長（安藤辰行君） 他にありませんか。

○委員（関口正博君） はい。

○委員長（安藤辰行君） 関口さん。

○委員（関口正博君） すいません。事象だけ見れば、そもそもが木蓮というのは独立していくためにあったということで、これは素晴らしいことだと思うんだけど、ただこの株に関しては、やっぱり慎重にやった方がいいのかな。独立していく以上、当然そのまましていくことは、ちょっとおかしな話になるんじゃないのかなって気もしますんで、そこはしっかりと協議していただきたいなっていうふうには思います。

いずれにしても、ようやく木蓮から一つの会社が独立してたっていうのは、当初の目的はそもそもそうだから、もっとそういうのが出てくればいいなという思いの中で、やっぱり株だけはちょっと心配だなと思って聞いてましたんで、確認の方よろしくお願ひしたいと思います。

○委員長（安藤辰行君） 他にありませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） よろしいですか。

（「はい」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） ないようなので、これで終わりたいと思います。

（「はい」という声あり）

#### 【商工観光労政課職員退室】

○委員長（安藤辰行君） それでは2番目の報告事項についての協議ということで、報告事項4つありましたけども、何かありませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） ないようですので、これで終わりたいと思います。

#### ◎その他

○委員長（安藤辰行君） その他。

○議会事務局次長（成田真介君） 次回の定例の常任委員会ですけども、7月10日木曜日午前10時からとなりますので、よろしくお願ひいたします。

○委員長（安藤辰行君） 他にありませんか。

（「なし」という声あり）

○委員長（安藤辰行君） なければ、これで終わりたいと思います。

今日はどうもありがとうございます。

[閉会 午前 10時53分]